外国からの方がよく見える

外山　滋比古

外国文化の研究は困難である。すくなくとも自国文化としての研究に比べてはるかに困難である、というのが一般の考え方であろうと思われるが、はたしてそうであろうか、と疑うところから、外国文化研究の方法論を考えてみたい。

また、そういう困難な研究を、なんのためにするかという疑問は、多くの外国文化研究者の胸底にひそみ、ときどき頭をもたげる厄介なものであるが、それは、おもしろいから、研究するのであるという考えに立つ。その上でいかにして、外国のものが、おもしろくなりうるのかという原理的な考察を試みようとするのが、本論である。

はじめに、パーソナルなことを少々のべるのをお許しいただきたい。

私は、日本のことはごくわずかしか知らないし、外国のこともほんの少ししか知らない。太平洋戦争中に敵国イギリスの言語と文学に興味をもって専攻の学生となって以来、50有余年、研究は日暮れて道なお遠し、をかこつものである。こういう人間が日本学にふれてもの申すのは、おこがましいのは充分承知しているけれども、学際的、国際的を標榜するシンポジアムであるから、許されるであろうと思ってまかり出たのである。不見識、誤解についてはあらかじめ寛容を乞うものである。

日本の英文学研究について、外国文化研究の一例として、すこしふれておきたい。明治初年から130年にわたる英語、英文学研究の歴史があるが、前半の50年は、外国を意識した英学が行なわれた。それが1930年ごろから、日本人としてではなく、イギリス人との違いを認めない学問研究が志向されるようになり、日本英文学会が生まれ、英国における研究、批評の紹介、解説が主要な活動となって、外国研究の性格が失われたとまではいかなくとも、すくなくともあいまいになった。研究方法が誤っていたというより、むしろ研究方法そのものが存在しなかった。あたかもイギリス人のごとくであるのを理想としてすすめられたのである。

当然、イギリス留学がもっとも望ましい準備であったが、その機会に恵まれるのはごく一部のエリートに限られた。その選ばれた俊秀の留学は、これまたごく一部の例外をのぞけば、俗に「学を留めた」と言われる結果に終った。誤った研究方法（approach）を身につけて帰国したのである。私は、それを見て、断然、留学をしないことに心を決めた。戦争中の敵国であり、その後敗戦国の研究者としてこの決心はもっとも現実的なものであったと言ってよい。しかし、留学的方法が大勢であった学界において、この非留学主義は手痛い打撃をうけることになった。

ただ、この間は、心なぐさめられることもないではない。Arthur Waley が、「源氏物語」英訳という大業をなしとげたあと、その功に報いようとした日本に招聘された。ところが、ウェーリーはこれを断った。一度ならず、三度招かれたのだが、三回とも辞退してしまった。自分が愛したのは、本の中、千年前の日本である、いま日本を訪れて、その夢の世界を崩してしまうのは忍びない、というのがその理由であった、といわれる。その心はつよく非留学主義の私に訴えるものをもっていた。

こういう背景をもったひとりの研究者が、異文化研究一般について考えたのが以下である。

「水を発見したのはだれであるかわからないが、金魚でないことははっきりしている。」水魚の交わりという。魚は水と切っても切れない密な関係にあるけれども、水を「知る」ことはできない。もっとも不適な立場にあると言ってもよい。近すぎる。近いものはよくわからない。

どんな秀れた外科医でも、自分の手術をすることはない。できない。してもうまくいかない。自分でなく、わが子の手術ですら、他に委ねるのが普通である。近いものは危険なのである。

たとえば、青森の奥入瀬渓谷はどうであろうか。いまや知らぬ人もないほどの天下の景勝の地であるが、それを世に広めたのは土地の人たちではなかった。東京から来遊した国文学者大町桂月の発見によるのである。昔から住みなれた人々にとっては渓流はただの川にしかすぎなかった。美しいとは思わない。身近にあって、なれてしまったものの姿はよくわからないのである。「遠くより眺むればこそ白妙の富士も富士なり、筑波嶺もまた」という古歌の通りである。当事者には見れども見えないところがあまりにも多い。

親は自分のことをなんでも知っているつもりであるが、その実、ほんとうに大切なことは知らないでいる。むしろ、他人からの方がよく見ている。親はそれを認めようとしないために、しばしば問題が生じる。

ひとはまた、自分のことは自分がもっともよく知っているという錯覚にとらわれていて自叙伝などを書いたりするが、この自伝が他人の書いた伝記よりすぐれているのはむしろ例外的である。その伝記にしても、生前の近親者や親しい友人などの書いたものより、ほとんど面識がなかったような人間の方がすぐれたものを生み出すのは歴史が示している通りである。法廷などにおいて近親者の証言が証言として認められないのも無関係ではなかろう。

いまわれわれが生きている時代について、われわれがもっともよく理解しているとは言い難い。同時代史というものは資料としての価値も限定的である。歴史学はこの認識についてかならずしも充分であるとは考えられない。すくなくとも同時代史は過去についての歴史ほどの正統性をもっていない。近きものは近きものを客観することができないのである。

認識の問題における遠近法において、局外者（outsider）は当事者（insider）よりもよりよく見えるという逆説が成立するのである。「わたしは貝になりたい」などと言っても、貝になる気づかいのない人間によって貝類学は発達する。自然科学では自明的なこの事実が、対象の中へ入ることが、できるように考えられる人文科学においては、ほとんどつねに見落されてきている。人文科学の発達が自然科学におくれるのは、ひとつにはこの当事者的視点の脱却の困難によると言ってよいであろう。

非当事者、アウトサイダーが、当事者、インサイダーの方法によるとしたら、そんな不合理なことはないとなるのが当り前であろう。そういう不条理なこれまでほとんど反省されることなく続いてきたのは不思議といってよい。当事者の方法のもっとも強力なのが、文献学的、発生研究である。これはアウトサイダーにはきわめて困難な要素をもつものであって、すくなくとも、インサイダー並みにこれを推進するのは至難であるとしてよい。しかるに、異文化研究は、独自の方法の確立を見ないため、自文化研究と同じ手法をとらなくてはならなかった。注入されたエネルギーの大きさにもかかわらず、それに見合った成果をあげえなかったのは、むしろ、当然としてよいであろう。アウトサイダーはまず、この文献学的、歴史的実証主義的方法からの袂別する用意がなくてはならない。

アウトサイダーの方法は、解釈的方法である。事象がいかにして発生、出生したかの究明はインサイダーの方法、文献学に委ねればよい。アウトサイダーは、その事象、作品をどのように理解するかという受容論を志向すると同時に、ゆるやかな比較法を内包するものである。そのためには、19世紀以降の文化を拘束してきたナショナリズム的思考からも自由になる必要がきわめて大きい。自国の文化を他国に比べてすこしでも優秀なものであることを明らかにしたいという愛国的情念は事物や作品の実体をくもらせる霧のような作用をもって、自国文化研究を歪めてきたと考えても不当とは言われないであろう。

ナショナリズムの枠を脱却したところに、そういう地理的歪曲をのりこえた客観的認識の座が存在するはずで、それが、インターナショナルな社会学的研究になるのは容易に了解される。これまでの異文化研究は異文化を排除して絶対的な主体性を主張する文献学、ならびにその付随的思考という、本来、とうてい両立しえない情況においてすすめられなくてはならないという不幸を背負ってきた点をしっかり見据えなくてはならないのである。

つまり、アウトサイダーのアプローチは、インサイダーの方法と、真っ向から対立し競合し合う性格のものである。自然の成り行きとして、アウトサイダー的な研究に対してのインサイダー側からの反発、批判、攻撃は熾烈なものになることが予想されるし、実際にも、そうであった。それを見越してアウトサイダーは、心ならずも、あるいは心から、インサイダーの知見に近接、もしくは、それに迎合する。はなはだしきは、みずからの主体を放棄し、知的正直をもかなぐりすてて、インサイダーのあげた成果を踏襲し、はなはだしきに至っては、それを盗用することで、みずからの研究を生み出そうとする知的自殺行為が、これまで、いかに多かったことであろう。アウトサイダーはいかに苦しくても自己の立脚点を見失ってはならない。

もっとも、日本文化、文学の研究について言えば日本人のインサイダー的方法がかなり不徹底なこともあって、アウトサイダーの研究に対して、寛大であるという事情がある。欧米諸国ではアウトサイダー研究を例外的な場合をのぞいて黙殺するのが常であるけれども、日本の研究者は外国人の研究に対して寛容というよりむしろ歓迎的であることがすくなくない。日本文化のアウトサイダー研究は、この点で、ほかの異文化研究に比べて恵まれているといってよい。

アウトサイダー的方法は、インサイダーの見えていない、気付かないところへ注目、洞察の目がとどくところに、利点をもっている。文化人類学者ルース・ベネディクトは、戦時中のアメリカにおいて、日本を訪れることなく、日本人の国民性の構造的、本質的なところを看破した。それは日本人のほとんど自覚しないところを強調したものであったにもかかわらず、インサイダー側の日本人から肯定的に受け入れられたのは特筆すべきことであったとしてよかろう。

アウトサイダー研究は決して容易ではない。多くの困難をのりこえなくてはならないが、それはなにもアウトサイダーに限ったことではなく、文化研究に必然的な困難と言うべきである。インサイダーもまたきわめて困難な状況を克服しなくてはならない。それはむしろアウトサイダー以上であるといってよく、それは認識が、近きもの、自己を対象としたときに不正確になるという既にのべた理由による。両者の困難は異質なものであるが、本質的には、アウトサイダー以上にインサイダー研究は難しいとしても誤りではあるまい。

前章において、非当事者、局外者、アウトサイダーの方法は解釈的であるとのべた。それは「あるがまま」(as it is) の発生を究明するのではなく、「見え方」(as it seems) を明らかにしようとするのが特色である。

「あるがまま」の研究が、発生、制作、原型に関心をもつものであるとするならば、アウトサイダーの「見え方」にかかわる方法は、受容の方法である。文化事象が、もともとどのようなものであったか、どのようにして生起したかというインサイダー方法に対して、アウトサイダーのアプローチは、それがどのように理解、評価され、また、変貌するかという面に注目するものである。

もちろん、インサイダーも解釈をしないわけではない。ただ、それは、比較的細部についての微妙な差異の弁別を主とする傾向がつよい。それに引きかえ、アウトサイダーの解釈は全体的、構造的である。

文学について言えば、現代の文学に対してインサイダーは二次的情報を収集することで解釈の代用とすることがすくなくない。同時代文学を研究対象とするインサイダーは、その方法の性格からして、きわめて大きな壁をもっている。それに対する配慮もなくて行なわれる研究に価値があるとするには、特別のレトリックが求められる。

他方、アウトサイダーは、同時代文学に対しても、充分なデタッチメントの距離をもっている。その解釈は、深部に及び、構造的部分を抽出することが可能である。深部の構造についての洞察ということは、作品の古典性にかかわる。アウトサイダーは同時代文学作品に対しても、古典的であるか、ないかという根源批評を行なうことができる。インサイダーでは30年、50年たってからでないと、古典性を見すえることはできないのを考えると、アウトサイダーはインサイダーに先行し、予言的でありうるのである。インサイダーの同時代批評はほとんどつねに後世の修正を受けなくてはならないが、アウトサイダーははじめから歴史的評価を下すことができる。この点をアウトサイダーはしっかり自覚してかかるべきで、そうすれば、インサイダー研究を先導することすら可能になる。インサイダーはアウトサイダーの先見性に敬意を払う用意がなくてはならない。

インサイダーの意識をすて切れない研究者も自国の古典に対して、好むと好まざるとにかかわらず、アウトサイダーの位置に立つことになるのであるから、その方法と知見から学ぶところがなくてはならない。従来は、アウトサイダーのアプローチを無視した、文献学的方法によってきたために、このあたりの問題があいまいにされていたのである。

アウトサイダーの解釈は、文献学的次元をこえるところにおいて、インサイダーの解釈を左右することができるようになる。局外者研究はこのことに勇気づけられるはずである。インサイダーの後塵を拝することに終始すべきではない。

アウトサイダー・アプローチの典型的な形式はイーヴスドロッパー (eavesdropper) の方法である。イーヴスドロッパーとは、立ち聞きをする人のことである。立ち聞き、では誤解を招きそうだから、あえて、英語であらわしたのである。

インサイダーにとって、つまらないことが、イーヴスドロッパーとしてアウトサイダーが見ると、おもしろくなる。火事とケンカは大きいほどおもしろいというのも、イーヴスドロッパーの見方である。火事にしてもケンカにしても、当事者にとってはたいへんなことで、すこしもおもしろいもので

はない。ところが利害関係のない第三者から見ると、これがおもしろい。大きければ大きいほどおもしろくなるのである。イーヴスドロッパー価値ともいうべきものである。

アリストテレスが、現実におこれば由々しいことが、舞台の上で演じられるのを見ると、美しいと感じる。それは見るものの感情を浄化させるからだ、というカタルシス説をのべて、芸術の効用を弁護している。これも、イーヴスドロッパー価値の一種であると考えることが可能で、いわば人間性に深くかかわる快感を生み出すのがイーヴスドロッパーの立場である。

演劇はこのイーヴスドロッパー効果の様式にほかならない。近代ヨーロッパの劇場はその点もっとも具体的で、四つの壁のひとつを外したものが舞台である。とりのぞかれたその壁から集団的に、公認された立ち聞き、のぞき見をするのが演劇である。現実は禁忌になっているイーヴスドロッパー行為は芸術の次元において許容されるのだが、それに非社会性が介在するのは是非もない。古来、演劇上演がしばしば検閲、取締の対象となってきたことは偶然ではない。イーヴスドロッパーの位置からすると、きわめて多くの事象が、美的性格をおび、快感をもよおすものになり、したがって価値のあるものになることを確認しなくてはならない。

文化研究においても、局外者のイーヴスドロッパーの立場に徹するならば、インサイダーにとっては何の変哲もないものまで、新しい輝きをもったものとしてとらえられるようになる。当事者にとってはむしろ迷惑で、避けたいようなことでも、非当事者にとっては興味ある研究の対象になるはずで、それを放置しておく手はない。

なぜ外国の文化を研究するのかという疑問に対する答えは、したがって、こうなる。アウトサイダーにとって外国文化はつねに興味の対象になる。きわめてつよいその魅力にひかれて、研究が始まる。そこになにか実利的効用があるのではない。特定の思想を充実するためでもない。ただ、おもしろいから、研究のための研究をする。それは没目的的に純粋であるところでスポーツに通ずるところをもっている。外国文化研究は、おもしろいから、魅力があるから、するのであって、なんかの目的のためになされるのではないとするのが本道である。

文化にとって、インサイダーとアウトサイダーを区切り、仕切っている目に見えない壁は、アウトサイダーにとって圧倒的な障害であるように感じられる。しかし、イーヴスドロッパーの方法が有効でありうるのは、ほかならぬこの壁があるからである。壁の外に立てば、内ではなんでもないことが、わかりにくいものになる。と同時に興味の対象にもなる。インサイダーは、あまりに近いため、あまりに深い関係があるために、事象をあるがままに受けとることが困難である。身につまされたり、目をそむけたくなったりする。そういうところで研究をおこなうのは自然ではないであろう。

外国の研究者が、この内外をへだてる壁の中に入りたいと考えるのはむしろ自然なことであるが、しかし賢明ではない。留学などしてその中側に入ったように錯覚するのはかなり危険なことといわなくてはならない。アウトサイダーはあくまで、壁の外にあって、イーヴスドロッパーの座位に徹すべきである。そこでの経験をつめば、解釈の名手となることができる。これはインサイダーには及びもつかぬところである。

アウトサイダーに立場において、イーヴスドロッパーとしての研究をすすめるにあたって、外国の研究者を苦しめるのは、文化事象、作品をその発生時点にのみ注目し、もとの形を絶対と考える歴史

主義である。そして絶対的な価値をもとのものにのみ認めようとする文献学では、アウトサイダーの出る幕に存在しないといってよい。定説とか正説というものとも無縁であるのは、イーヴスドロッパーにとって、発生時点における意味をとることは原理的にも困難だからである。ケンカしているふたりがいるとして、それがどのような理由によっておこったものであるか、知るよしもない。ケンカの当事者にとっても、それがかならずしも正確にとらえられるとは限らないが、源泉思考からすれば、当人たちの方がのぞき見している人間よりはるかに本当のことに近いところがわかっているとするのが、歴史的研究である。とにかく、アウトサイダーにとっては、当事者の発生事情をはっきり把握するのは困難である。できるのは、“客観”における“見え”である。客観は唯一の視点ということではない。利害関係のないところからの知見が客観になるのである。つまり、ひとつの事象について、いくつもの複数の客観が存在するということにほかならない。同一の事象に対して十人のイーヴスドロッパーがあれば、その理解、解釈は十色になる。相対的であって、絶対的ではない。これが学術的に、イーヴスドロッパー的研究が認知されにくい理由でもある。

イーヴスドロッパーの解釈は、多様な変形を容認する。それは、原典、正本のみを対象とする文献学的研究とは異なり、異本を注目する。正本よりむしろ異本に興味をもつ態度になる。ケンカの当事者のケンカの解釈が原典的であるとするなら、それを外部から見たときの解釈は異本的である。そもそも異本自体が、そのような第三者的解釈にもとづいて生まれるものであり、それ故に、文献学からは目のかたきにされるのである。しかし、異本を生じないような作品は、湮滅する運命にあるのもまた事実である。異本あっての正本であることを忘れることはできないし、文献学にしても異本群の中から正本をさがし求める作業をしているのである。文献学によって、古典を生み出すことはできない。多くの異本の生まれた作品を、古典的価値をもったものとして、これに源泉探求の作業を加えているのである。原典しか存在しないものを、文献学的研究がとりあげることは事実上不可能である。この間の事情はこれまで充分に考察されたことがなかったように思われる。

イーヴスドロッパーは受容論的活動をするのである。どのようにして、発生したかというのではなく、いかにしてわれわれの関心をひくかという視点に立っている。さらに、各人のおかれているコンテクスト（context）、広義の文化的文脈は各人各様であるために、その解釈が一致することはあり得ない。当然、結果としての異本は諸説紛々、十人十色の多様なものになる。混乱と見えるかもしれないこの状態を文献学は極度におそれきらう。その結果は、いっさいの解釈を拒否するまでになる。すこしでも受容者の解釈が加わると、それは、「作文」として扱われ、研究の資格を拒まれるという事態をまねいた。文学研究なども、そのために無味乾燥、およそ知的興味とは無関係なものとなって久しい。原典研究は、未知の、あるいは亡失していたものが発見されるといった希有な出来ごとでもないかぎり、不毛な校訂の作業といわなくてはならない。

文献学は、異本を嫌い、諸説紛々をおそれる。それを整理するのをその任としているかのようで、多様な異本群に対して、権威によってこれを裁断しようとしする、正説、定説を打ち出すことが出来れば、成功と考える。その権威は、作者みずからの証言、原典、作者のコンテクストなどさまざまであるが、ここでは文献学自体が知らずしらずのうちに異本的思考をとっているのである。文献学は多を整理して一に帰せしめるのを目的としている。

アウトサイダーのアプローチがこれまではっきりした形をとらないでいたのは、あまりにも強力、

支配的であった文献学的方法に圧迫されていたためである。いつとはなしに、一元的な考え方をしてきたために、本来のはたらきが見られなかった。

異本を容認するにとどまらず、異本こそ価値あるものと見る受容論においては、諸説が乱れとぶというのは、むしろ望ましい状態である。それに対して、性急な裁断を下すことなく、それぞれを容認する必要がある。

具体的な例をあげれば、シェイクスピアの『ハムレット』の中の名文句、To be or not to be についての解釈を見ると古来、おびただしい註解が施されている。文字通り諸説紛々である。シェイクスピアの作品は、戯曲である。劇作品は、作者の意図が直接的にあらわれないこともあるし、その原典がかならずしも文献学的に整備しつくされたものではないこともあり、この名句について文献学はほとんどなすところがない。

しかし、これまでの文学研究は文献学につよく影響されてきたために、この多様な異説群をなんとか整理してもっとも妥当なものに絞りこもうとしたのである。もちろん、それはできないことで、結局は、新しい異本的解釈を生むだけのことになった。

本来、アウトサイダー的方法に立った文化研究ならば、諸説をおそれない。混乱を排除しない。すくなくとも、そうであるべきものである。To be or not to be の解釈がこれまでどれくらいあるか正確にはたしかめることはできない。ファーネス編集註シェイクスピア版の『ハムレット』を見ると、細字で数ページにわたる諸家註解の記録があるが、もちろんそれは主なもののみである。

局外者的、異本論の立場は、これからの説のうちのどれがもっとも正しいか、したがって作者の考えた意味であるかを決定しようとする文献学的なやり方とは違って、諸説をそのまますべて容認して、その総体が、この有名な文句の意味であると考えるのである。いわゆる誤った解釈をふくめて、原テクストの意味であるとするところが異本論の、したがって、アウトサイダー、イーヴスドロッパー的研究の真骨頂である。

これならば、外国の研究者も、本国の研究者と肩をならべて発言することができる。作者の真意、意図を絶対視する文献学的考証においてはほとんど第一級の研究は期待できないけれども、作品の可能性を拡大する異本肯定の考えによるならば、局外者の方がむしろ重要な仕事ができるということも言いうる。

起源、発生の研究にも発見ということがあるけれども、多くは一回性のものである。決定的研究のあとには余人の立ち入る余地はもはやない。それに引きかえ、異本を容認する受容論的研究においては、同じものについて、ほとんど無限の新しい解釈の出現を予想していて、はなはだ開放的である。そればかりではなく、受容的研究はその性格において創造的である点でも、文献学的研究が発見的であるのと対照的である。

受容論は新しい異本を生み出すところにおいてその本領を発揮する。新しい異本をつくることの出来ない研究は弱い研究であるとしてよい。それは、なにがしか先行の解釈、原典に変化を加え、加工するところで、創作的活動の性格さえおびている。文献学では、これを作品の神聖を冒すものとして頭から否定してしまうけれども、そういう考えでは、古典を生み出すことも、古典成立を説明することもできない。作者の手許において、あるいは、発表と同時に、古典となった作品はかつて存在しなかった。古典は異本によって形成される。異本群が一定のところに収斂したところで古典的性格が発

生する。それは作者の意図したものと、多少とも異なったものになっているのが普通である。異本を認めようとしない文献学的研究では、古典の形成を明らかにすることはできない。

文献学的立場に立つインサイダーに対して受容論の立場にあるアウトサイダーは古典性の要素をふくむ異本を呈示する。その解釈はインサイダーより先行しうる。当事者に優先する新しい異本を生み出すところにおいて、局外者はインサイダー以上にすぐれた条件にめぐまれていることにある。

海外において日本文化を研究するのは、明確に局外者の立場にある。そのために、当事者の知らない困難を背負いこんでいるのも事実であるけれども、当事者が、次の時代になるまでは期待できない異本をつくり出すことが出来るという点に関しては、むしろより有利な条件にあることを認識すべきである。アウトサイダー研究は困難ではあるにしても、おもしろい困難である。

異本を承認するならば、研究ではないが、翻訳もまた異本的受容のひとつの形式として価値を有することがわかる。インサイダーの立場から見るならば、おそらく、ほとんどとるにたらないように考えられる翻訳であるけれども、アウトサイダーにとっては大きな意味をもつ異本の創生であって、創作的ですらある。これまで文献学的思考のつよい状況において、翻訳は無視されてきており、そのことが、国外の研究者を苦しめてきたが、翻訳も解釈が加わって、はじめて独自の存在となりうる。インサイダー的文学観に支配された社会においては、翻訳はつねに軽視しされなければならないが、かりに認められるとすれば、原典にすこしでも近くなりうるというところから、逐語訳、原文忠実を金科玉条とする。いくら原文に忠実であろうとしても、訳である以上、高度の解釈が加わっているのであるが、それを認めようとしない翻訳が大勢を占める。これがおもしろくないのは当然であろう。異本であるのが表現として翻訳のもっとも大きな性格であるから、原文で読むときよりもはるかに大きな異本的解釈が施されてはじめて翻訳は文学になる。ときとして、原作の墨を摩し、さらには原作をしのぐ芸術性をもつ翻訳も現実に存在する。

アウトサイダー的研究から見れば、翻訳がきわめて高い価格をもつことが了解されるであろう。翻訳を恥じるのは不当である。

研究対象との地理的、心理的距離について、アウトサイダーはインサイダーとの間に、決定的な差異がある。したがって、両者の見解に大きな違いがあらわれるのはむしろ当然である。そういう場合、局外者研究は一方的に遠慮しなければならない、とするのが作者を絶対視する文献学的世界である。そのため、アウトサイダーはインサイダーと意見を異にすることを怖れ、はじめからみずからの解釈を放棄、インサイダーの解釈を受け売りする。多くの外国研究者がこれを行なってきたのである。これではなんのために、困難な外国文化の研究に苦しむのか、わからなくなる。それを自省するだけの自由さえ、これまでの研究者はもっていなかったように思われる。

アウトサイダーはインサイダーと解釈、評価を異にすることをはばかってはならない。真摯な研究の成果であれば、インサイダーの反発、批判をおそれることなく、これを発表する必要がある。

インサイダーは、狭量な排他主義にまどわされて、アウトサイダーの異説を排除するようなことがあってはならない。これまでのナショナリズムの枠内の文化研究ではこの傾向は一貫して顕著であったといわなくてはならない。インサイダーは、アウトサイダーの異本的解釈を迎え、これと競い合うという友好的対立関係になることを喜ぶ雅量をもつのが、国際的学問のあるべき姿である。

内外の異質な研究成果が衝突し、それが止揚されたところにおいて、高度に調和的な世界が実現する。これまでの国家単位を中心とする研究態度では考えることの困難な次元の価値をつくり出すことが可能になる。

このような国際的協調によって、はじめて文化交流は具体的結実をうるようになるはずで、いたずらに、文化の交流を叫んでいても意味はない。

日本の学界が、閉鎖的になり、外国の研究者を締め出すのではないか、という危惧が外国研究者の中には根づよいようであるが、これは杞憂である。というのも、日本は、アイランド文化の社会であるが、それは外国からのすぐれた文化を摂取し、これを熟成した結果である。外国外来の文化への深い敬意をもっている。ときには崇拝的ですらある。アウトサイダーの異説、異本的解釈に対しても、日本ほど寛容なところはすくないのではないかと思われる。アウトサイダーにとって日本人はもっとも親しみやすい友好的対立者になりうるはずである。

ここ、お茶の水女子大学の大学院に国際日本学という、一見、不思議な名称のコースが設けられたのも、内外の研究の交流のおこなわれる機関であることを明確にするために、あえて国際を冠したものと考えられる。

新しいインターナショナルな研究が続々と生まれることをつよく期待する。

（講演は、です・ます体でなされたが、記録としては、である調に改め、一部、加筆した）